

辞書・言葉の魅力 (奥 美琴)

[おすすめしたい本]

『舟を編む』

三浦 しをん／著

三浦しをんさんの『舟を編む』は、辞書「大渡海」を作るドラマを描いた物語です。印象的な場面に、次のようなセリフがあります。「辞書は、言葉の海を渡る舟だ」「海を渡るにふさわしい舟を編む」この言葉から、辞書の編集に携わる人々の情熱が伝わってきます。そして、登場人物の人間関係、そこでの変化もまた見どころです。

主人公の馬締光也は、少し風変わりな真面目な青年です。営業部に所属していたものの、対人関係能力の低さから厄介者扱いを受けていました。しかしある日、彼はその真面目さや言語に対するセンスを買われ辞書の編集に関わることとなります。さらに、作中には辞書編集部での出来事だけでなく、登場人物たちの出会いや別れ、成長も描かれています。それらは全て「言葉」があるからこそその変化であり、言葉の持つ力を実感させられました。

辞書作りには多くの時間と手間がかかります。用例の収集から始まり、この言葉は現代の辞書に載せるにふさわしいか、この辞書の目的に合っているか、どうすればこの言葉の意味が正確に伝わるのか、そういったことを何度も議論し、悩みながら、地道に何年もかけて作り上げていきます。そして、ようやく私たちの元へ届いているのです。

この本を読んで、私は小学生の頃、少しでも気になった言葉があれば国語辞典で探し、付箋を貼るということに夢中になったことを思い出しました。そして、改めて辞書や言葉の魅力を思い出しました。普段はどんなことでもスマートフォンですぐに意味を調べられてしまいがちですが、辞書を開いて自分の目で言葉を探すことは、予想外の発見をすることもあり、非常に面白いと感じます。

読書が好きな人はもちろん、普段本を読まない人にもおすすめしたい作品です。この本は、いつも身近にある言葉について、少し考えるきっかけをくれます。ぜひ手に取ってみてください。

紹介文部門 銀賞

ルーマニア語について、あなたの知っていることを聞かせてください。(坂下 葵)

[おすすめしたい本]

『千葉からほとんど出ない引きこもりの俺が、一度も海外に行ったことがないまま
ルーマニア語の小説家になった話』 済東 鉄腸／著

ルーマニア語について、あなたの知っていることを聞かせてください。

何も答えられなかった方、ルーマニアで話されている言語と答えた方、「ルーマニア語とは」と何時間も語ることのできる方、すべての方にこの本をおすすめします。

ノンフィクションエッセイであるこの作品のあらすじは、タイトルから一目瞭然です。

著者は難病と鬱病を患い、住んでいる千葉県どころか自室からもほとんど出られず、映画を見て過ごす日々を送っていました。そんな中、映画を通じてルーマニア語に出会った著者は、好奇心に突き動かされ数々の挑戦を繰り広げることとなります。そして、その冒険の舞台は彼の自室なのです。

スケールの小さな話だと侮るなかれ。著者の目指したゴールとは、ルーマニアの文壇に登ること。

驚くべきはその行動力です。参考書や映画でルーマニア語を学び、SNSを駆使してルーマニアの友人を作り、ルーマニア語を操る詩人の弟子になり、時に回り道や足踏みをしながら、それでも著者は前に進み続けます。

この本には、情熱と挑戦で人生を彩ることの素晴らしさが描かれています。困難な状況の中で、絶えず可能性を探し続ける姿に涙が滲むこともありました。

著者は言語を学ぶ中でルーマニア語だけではなく、ルーマニアという国や、日本の社会すらも捉え直します。描かれるのは自身の抱える鬱病や難病に対する憤りであり、人種や性別、職業の差別に対する抵抗です。

私がこの本をおすすめする理由は、もがきながらも必死に生きる著者の息吹を皆さんにも感じてほしいからです。そして現代社会における他者との関わり方を深く考えてみてほしいのです。

この本から得られるものは他にも沢山あり、それぞれ何かを掴んだ感覚と共に本を閉じるでしょう。

この本を読んだ後のあなたに、私はもう一度問いかけます。

ルーマニア語について、あなたの知っていることを聞かせてください。

今、私は生きている (香田 明彦)

[おすすめしたい本]

『今日われ生きてあり』

神坂 次郎／著

鹿児島県南九州市にある「知覧特攻平和会館」を何年か前の夏に訪れた。連合軍に対抗し、日本への侵攻を防ぐために、日本軍がとった作戦の一つに特攻があった。20歳前後の若者が、重さ250kgの爆弾を装着した戦闘機で敵の艦船に体当たりをして沈めようとする。知覧基地は日本の最南端の基地として多くの若者が飛び立った。知覧特攻平和会館で、多くの若者たちの写真、遺書や手紙を前に、ただただ私は涙を流し、立ちすくんでいたことを今でも覚えている。

神坂次郎の記した『今日われ生きてあり』には、19話があり、それぞれに「今を、今日を生きる人間」が描かれている。戦時下にあり、愛する人や家族を残し旅立つ若者の純粋な想いに、本書を読み進めるたびに私は心がふるえる。

第16話には、岐阜県多治見出身の若い航空兵が描かれている。「郡上のなあ、八幡出てゆくときは、雨も降らぬに袖しぼる」岐阜県民にはなじみの深い歌詞であるが、知覧の地で、特攻隊員として旅立った多治見出身の若者が別れの唄として「雨も降らぬに袖しぼる」と歌った想いを、目を閉じて想像する。

「人間として生に未練のないはずはない。20代の青年が死を前にして思うことはなにであろうか。」と神坂は記す。

『今日われ生きてあり』を読むたびに、「あなたは、今日、ひたむきに生きていますか？」と知覧から飛び立った若者たちから問われているように思う。

初夏の知覧の町で知覧茶を飲みながら歩いていてさわやかな風が吹いた時、知覧を飛び立った若者たちに、何かを話しかけられたような気がしたことを思い出す。

戦後80年であり昭和100年の令和の現代に、「平和」「生きる」について深く考えていきたいと思う。80年前の若者たちに、「今、前を向いてひたむきに私は生きている」と、笑顔で答えられるように……。

孤宿の人は出会って別れて生かされた (安西 真澄)

[おすすめしたい本]

『孤宿の人』

宮部 みゆき／著

人は生まれて、多くの人と出会い、別れながら生きてゆく。出会った人から何を学ぶかは自分次第だ。どんな境遇でも人は一人では生きていない。私は十六の夏に父を亡くした。もっと父から教わることがあったのに父は逝ってしまった。けれどその時「これで私は自由だ」と思ってしまった。振り返ればそんな生意気で危なっかしい私を見守る大人がいた。親戚が私を働かせるよう母に言ったそうだった。けれど母は黙って学ばせてくれた。担任の先生は私を静かに見守り評価してくださった。職場では諸先輩方が社会人としての振る舞い方を家族のように教えてくださった。世間知らずな私はそれを新鮮な気持ちで吸収した。多くの失敗と挫折を経験し仕事を覚える楽しさも知った。

物語の時代は水野忠邦が幕府の中樞を担っていた頃。江戸で一人の女の子が不遇の出生をする。邪魔者の少女は金比羅参りを口実に連れ出され置き去りにされてしまう。そこから運命は変わってゆく。少女は多くの人に出会い学び成長してゆく。関わる人々も彼女の素直さ純粋さに心を寄せてゆく。『孤宿の人』はそんな物語だ。少女の名前は「ほう」阿呆の「ほう」だ。置き去りにされたそこは四国・丸海藩。ほうを引き取り下働きさせながら、温かく見守る人がいた。その人は、ほうの名前は方向を示す「方」と教える。そんな時、江戸から故あって幕府の要人加賀守守利が送られてくる。モデルは鳥居耀蔵だ。幽閉された加賀殿の世話を任されたほうは、彼と心を通わせ読み書き算盤を習う。やがてほうの名は「宝」のほうだと加賀殿から授かる。ほうを逃がし遂に加賀殿は覚悟の暗殺となる。騒動の中、ほうは生かされた。

作者は少女の名前に希望を仕掛けた。私はそこに感動し、ほうの境遇に自分を重ねた。何を幸とするかはその人次第だ。儼ならない時、辛い時、ほうの生き方に触れてみてはいかがだろうか。

私にとって大事な1冊 (大矢 莉果)

[おすすめしたい本]

『余命 3000 文字』

村崎 羯諦／著

『余命 3000 文字』は、「あなたの余命はあと 3000 文字きっかりです」という、ちょっと不思議で衝撃的な宣言から始まる話です。言葉を話したり書いたりするたびに命が減っていく中で、主人公はどう生きるのかを選びます。最初は何もせず、できるだけ静かに日々を過ごそうとしますが、ある日、火事現場で助けを求める子どもの声を聞き、迷いながらも思わず叫び、火の中に飛び込みます。限られた「文字数」をどう使うかという問題が、生きる意味や人とのつながりと深く結びついてくるのです。

私が特に心に残ったのは、主人公が「ちくしょう！」と叫び助けに行く場面です。今まで無駄な行動を避けてきた主人公が、命を削ってでも行動する瞬間がとても印象に残りました。どれだけ言葉を節約しても、本当に大切な時には自然と言葉が深く心に響きます。

この話を読んで、自分の日常を振り返りました。普段 SNS や会話で何気なく発する言葉に、どれだけの重みや意味を込めているのか。もし自分にも文字数の制限があったら、大切な人に何を伝えるかをもっと真剣に考えると思います。

作者は、「命の有限さ」と「言葉の価値」を、ユニークで少し笑えるような設定を通して描いています。短い物語なのに、読後には胸に長く残る余韻があります。全部で 26 の短編があり、どれも短時間で読めますが、一編ごとに違った驚きや感動があり、読み返すたびに新しい発見があります。

この本は、忙しくて長編を読む時間がない人や、短い中にも深いテーマを感じたい人におすすめです。また、普段の言葉づかいや人との関わり方を見直したい人にもぴったりです。「限りある命と限りある言葉」について優しくも力強く語りかけてくれる一冊です。

小説を読むことの意味とは何か (野村 久美子)

[おすすめしたい本]

『小説』

野崎 まど／著

私は小説を読むのが好きで、一日に三時間はその時間に充てているが、本を読まない人から見るとなぜ本を読むのか不思議らしく、私は長いあいだ、小説を読むことの意味を考えていた。そんな時に出会ったのが、この本、『小説』だ。

主人公の内海集司は、同級生の外崎真と共に読書にのめり込んでいく。そんな時、噂で小説家の住む屋敷があると知り、屋敷に乗り込んだところ、現れたのが個性的な風貌の髭先生だった。彼は書庫の本を自由に読んでいいと言う。屋敷に通い、二人が熱心に本を読む姿に読者としての私の姿が重なる。早く先が読みたい、時間を忘れて本に読み耽ってしまう気持ちが痛いほどよくわかる。

読書を通じて通い合っていた二人はやがて別の道に進むようになる。外崎が小説を書き始め、内海は文才がなかったために、大好きな外崎を支える側にまわった。二人の友情がまぶしく私の目に映った。

ついに外崎が文学賞を獲ると、内海に問うた。

「内海くんは書かないの？」

その一言が二人の間に隔たりを作り、外崎は姿を消す。内海は小説を読むだけじゃ駄目なのかと悩んでいた。小説を読むことの意味、この本を読むうえで一番知りたい答えだ。

そして物語の舞台はアイルランドに移り、神話のような世界が繰り広げられる。数多の言葉が紡ぎだす結晶のような美しい文章に酔いしれ、涙が止まらなかった。まるで美しい音楽を聴いているかのようだ。これが読書をする喜びのひとつだ。頁を捲る手が止まらない。涙を拭いながら読んだ結末で、私はもう一度泣いた。読むだけでもいいのだ。私はまた、読書漬けの日常に戻る。

どうか、多くの方がこの本によって小説を読むことの意味を確かめてほしい。そこには極上の読書体験が待っているに違いない。

「本を出版する」ということ (平塚 しほ子)

[おすすめしたい本]

『雪夢往来』

木内 昇／著

お勧めしたい本は木内昇著『雪夢往来』。

江戸時代、豪雪地帯の様子を世に知ってほしいと思い立った鈴木牧之が数々の困難を乗り越え、40年後に『北越雪譜』を発刊するまでの奮闘記である。

越後塩沢の^{ちぢみ}縮仲買商・牧之は実在した地方の文化人であり、各地に交流する人々がいる。その伝を頼って、当時大人気の山東京伝や滝沢馬琴とも知己を得る。江戸では風流な雪も塩沢では命にも関わり難儀している。そんな雪国の姿を絵や文で提供し出版して貰おうと働きかけるが、両人の事情や仲介者、版元の都合等で中々実現しない。他にも何人か関心を示したが次々と亡くなってしまふ。最後に京伝の弟、京山が引き受けてやっと実現するその間、人々の私生活にも多くの山坂があり40年が過ぎる。

ではその『北越雪譜』とはどんな本なのだろう。私の住む高山も程度の差こそあれ雪国。雪の大変さはよくわかる。探したらあった！文庫等もあるが荒木常能という人が現代語訳した単行本がわかり易く絵も沢山載っている。実際に起きた話や言い伝えに合わせて繊細な絵が情景を想像させる。牧之の描いた絵を元に絵師が描き直しているが、解説によると現地を知らない為誤りや余計な手を加えたものもあるらしい。

更にもう1冊、『雪国を江戸で読む』という本を見つける。同じ塩沢出身の森山武氏が膨大な資料から牧之の足跡を辿り、当時の出版界の状況を解説したものである。出版までに40年もかかった事情を関係者の手紙や作品等から推理する。これは大河ドラマ『べらぼう』の世界とも重なり、ドラマを観る上でも助けになる。

『雪夢往来』を読んだら是非、後の2冊も順番に読んでほしい。むつかしい内容が意外とスンナリ腹に入る。それこそ読書の楽しみだと私は思う。

「十二次はおとなり」 (村山 嘉章)

[おすすめしたい本]

『木曜日にはココアを』

青山 美智子／著

「六次の隔たり」という仮説がある。知り合いの知り合いを六人辿れば、世界中の誰とでも知り合うことができる、というものである。あなたにも、新しく出会った人との共通の知り合いに驚き、「世間って狭いね」とこぼした経験があるのではないだろうか。その偶然に喜ぶときもあれば、苦笑いを浮かべるときもある。

本書はそんな「六次の隔たり」の二倍、十二編の短編小説だ。喫茶店で働く青年は、密かに思いを寄せている女性客がいる。雫みtainな瞳、肩まで流れる栗色の髪の彼女を心の内で「ココアさん」と呼んでいる。彼女はいつもきまって、木曜日の午後三時頃、窓際の隅の席でココアを注文し、手紙を読んだり書いたりしている。いつしか彼の中では、木曜日にはココアを捧げ、「お熱いので、お気を付けください。」と添えることがすべてになっていた。

ある木曜日、彼女が来店すると、いつもの席にはすでに頭の良さそうな女の人が座っており、彼女は別の席に座った。そんな日に限って、彼女の頬を一筋の涙が伝っていた。駆け寄りたいが何もできない。第一編では、そんな彼の若く、誠実でまっすぐな想いが描かれる。

第二編では先客だった「頭の良さそうな女の人」視点の物語が始まる。第三編ではまた別の人へ。登場人物の小さな関わりが繋がっていき、最後の第十二編は、ついに「ココアさん」視点で語られる。

ココアさんが喫茶店で楽しんでいた手紙は、海外の友人とのエアメールだった。ただ、その日はとある人にあててラブレターを書いていた。彼女はその手紙を渡すとき、「お熱いので、お気を付けください。」と添えるつもりでいるらしい。その言葉が向けられた相手を知った今、「六次の隔たり」のあとに「十二次はおとなり」と付け足したくなった。

六人いれば、世界中の誰とでも繋がれる。十二人いれば、世間の狭さが愛おしく、心地よく感じられる。十二の物語が紡ぐ甘さと温かさは、まさに一杯のココアのようだった。



トンネルの先に (嶋口 かりん)

[おすすめしたい本]

『雪国』

川端 康成／著

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」あなたはこの一文をどこかで聞いたことがあるのではないのでしょうか。『雪国』はその題名の通り、豪雪地帯にある温泉街が舞台です。

私がこの本を初めて知ったのは小学校四年生の冬でした。先生に「トンネルを抜けたら突然世界が真っ白になって『雪国』かと思った」と言われたのがきっかけです。私の住む地域は街から来るには一つ、小さな山のトンネルを通らなければなりません。小さな山に隔てられたこちら側はあちら側の、街の方に比べれば少し多く雪が降ります。先生はそれを楽しそうに伝えてくださいました。その頃の私はまだ、児童向けの小説に夢中だったので先生がなぜこんなに楽しそうなのかわかりませんでした。しかし、高校生になってこの本を読み始めたとき、これの事だったのだと楽しくなったのを覚えています。

長いトンネルの闇を抜けた先の白銀の世界。夜でも眩くその白が浮かんでいる光景を作者は「夜の底が白くなった」と表現しています。私は冒頭の二文で川端康成に心を掴まれました。私が雪国をおすすめしたい理由はいくつもありますが、特に、詩や俳句に通じるような洗練された美しい表現を味わって欲しいからです。高尚で質素で寂寥感に満たされた言葉、まさに日本の美と言えるでしょう。主人公島村の心理描写や、芸者の駒子の艶めきや、島村が見た何気ない情景や…。冒頭の二文だけでなく多くの巧みで印象的な言葉にあなたにも出会って欲しいです。

この小説が、日本語の霞のかかった景色のような曖昧で繊細な美しさを私に教えてくれました。私の日々の解像度を少し上げてくれました。少し難解で飲みこみがたい部分もありましたが読み終わった後の不思議な気持ちにあなたにも浸って欲しい。詩的な表現が好きなあなたにぜひ読んで欲しい一冊です。



糸を手繰る (松森 紗世)

[おすすめしたい本]

『真夜中のマリオネット』

知念 実希人／著

深紅の瞳に吸い寄せられるように、書店で目に留まったのは、『真夜中のマリオネット』の文庫版だった。表紙には人形を彷彿とさせるような美少年が描かれていて、彼に惹かれたのは私だけでなく、この本の主人公「秋穂」もきっと同じであったのだろう。

ある日、救急医として働いている秋穂の下に一人の重症患者が運ばれて来る。その患者こそが先程の美少年、「涼介」なのだ。涼介は妖しげな雰囲気纏っていて、秋穂はそんな空気に飲み込まれそうになっていた。その時、彼こそが秋穂の婚約者を殺した張本人だと刑事から告げられる。これが本作のおおよそのあらすじだ。

憎しみと悔しさに苛まれ、酷く怒る秋穂に対して涼介は弁明をし、共に真相を解明しようという提案を持ち出すのだ。犯人に復讐を果たしたい秋穂とその犯人とされている(仮)涼介との凸凹コンビが段々と真相に近づいていく展開はスピード感があり、物語の先が予想できないことも相まって、何かに操られるかのように、私は無意識のうちにページをめくり続けていた。筆者の圧倒的な文章力と専門的な医療知識を惜しみなく注ぎ通したと肌身で感じられる、鮮明で、繊細に創り上げられた文章世界がこの物語をより一層魅力的なものとしているのだろう。

正直に言ってしまうと、この本の魅力や、私の想いはこの文章だけでは伝えきれないと感じる。なぜなら、この本はいわゆるどんでん返しと言われる部類のものだからだ。最後の5ページ、全てがひっくり返し、呆然とする。実際に読んでみないことにはこの感覚を理解してもらえないだろう。

だから私は、この本を読んで欲しいと薦める。他では味わえない強烈な後味、マリオネットのように操られる読書体験を、是非皆に味わって欲しいと強く願うから。